

頬を傳ふて流れるといふ哀れ至極な物語であつた。  
○まことに同情に堪へぬ女の身の上である。仇な色香の待み難きは今更ながら、我とても「同じく是天涯淪落の人」である。相逢ふて斯う語り合ふ上は始めて逢つた者ながら、昔に淪落た身を泣かうではないかと、又もや曲を促し涙に袖を濡した。といふのが此一篇の大意ぢや。元來これは白樂天が故あつて左遷の身の上であつた時の作であるから、同情の語句に満ちて一入哀れ深く感せられる。さすがは大家の名篇ぢや、柄は若い時分から最も此詩を愛して居る。  
○所が袖の感じたのは、此の詩中に女が呼ばれて出て来る時の句に

「千呼萬喚始めて出来る。猶琵琶を抱いて半面を遮る」といふ所ぢや、千たび萬たび呼んで漸と出て来たが、猶面羞げに琵琶で以て半面を隠して出て来る、其風情は「未だ曲調を成さずして先づ情あり」といふてある如く、實に何とも云へぬ風情ぢや、さあ此半顔を隠して羞かしさうに出て来る所が實に彼の富士の霞と同様情趣があるのである。

○これについて毎度いふことぢやが、臨濟録に四賓主の説話といふのが、それはドチラも偉い師家と學人とが互に商量する一段であるが、其中に「善知識便ち半身を現す、學人便ち喝す」といふ文があ



る互に力量を商量つた所中々學人が傑い奴らしいので師家の善知識が初めはランダに對手にせなかつたが漸く半身を見せていよいよこれから眞劍の争となる所だ此脚跟下を見せず半身を現す所が師家の師家たる所で随分妙味のある段だ。

○がそれは宗旨の話としてすべて人には餘情といふものが無くてはならぬいざとならば獅子王のやうに全威を振はねばならぬが平常に富士の霞を遠らせるが如く琵琶女が半面を繞るが如く師家が半身を現するが如くにして滅多に見苦しい精神を暴露するものではない殊に婦人などは此心得を充分有つて貰ひたい。

○亭主が無理をいふすぐそれに反抗つて思ふが儘に罵つたり氣に入らぬことがあればすぐ面に表すといふやうな事では甚だ女の徳を害する斯ういふ場合には萬事控へ目にして餘情があつて欲しい、そこに女の女らしい情趣があると稱は思ふこれが私共の婦人觀ぢや。

○といふのが東嶽和尚のお話であつた。半身を現すと説かれたこの話を聞いてからモウ大方七八年にもならうか。和尚は早全身を地下深く隠されて了ふた。思へば懐舊の情に堪へぬ。



【七七】 萬年の壽

ある人が龜を一疋買つて泉水へ放し、明暮眺めて居る。ある時友達が出来、このごろはちつとも遊びに来られぬが、何うしたのだといふと、いや面白い物があつて、それで何處へも出ぬといふ。何ういふ面白い事だ。實は、あの泉水へ龜を放して居る。むかしから鶴は千年、龜は萬年といふから、あの龜も萬年生るかと思ふて、此間からためして居るのだ。

【七八】

かたちと心 (鳩齋道話)

古歌に「かたちこそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん。」指や足にかゝはつた事ぢやござりませぬ。皆心のことぢや。心がまがつてあつては、色は白からうが、鼻すぢは通つてあらうが、はえ際がうつくしからうが、夫は見せかけばかりで、何のやくにたゝぬ事、蒔繪の重箱に馬の糞入たやうなものぢや。これをほんの見かけ倒しと申します。飯たきのおさんどのが、ながしもとで鍋の尻をあらうてゐる。丁稚の長吉が側へ来て、おさんどん、御まへの鼻のさきに墨がついてある、見とむないと教へてくれる、おさんどんは嬉しがつて、そうかいどこに付いてゐると、指のさきに手拭をまいて額口でお



のれが鼻の先をながめ、後藤が目貫をほるやうに、そこら中ひねくりまわして、長吉どんモウとれたかへ。イヤ／＼ほうべたの方は餘計になつた、ドレ／＼どこにと水鏡に顔をうつして掃除してござる。おさんどんの心には、アノ長吉どんは可愛らしい子ども衆ちや、晩の御茶を杓子あたりで御禮申さにやなるまいと、滅多にうれしがつて、お禮をいふ。もし此長吉どのが、コレ／＼おさんどん、御まへの根性はしぶとい根性ちや、チツトふくれづらやめなされといふたら、お三どんが何といふであらうぞ、チト考へて御らうじませ、あたなめくさつた小丁稚づら、わたしが心がゆがんであらうが、三角に成つてあら

うが、おのれが世話になるもの歟。おのれ覚えてけつかれ、小便たれても、ふとんの洗濯はしてやりはせぬと。角のはえた鬼の様に成りまする、これはおさんどんの事ばかりぢやない、いやなに軍太兵衛どの、御社祓の御紋が、すこしかたよつて見えまする。軍太兵衛しかつめらしく肩衣を正して、コレハ／＼御氣を付けられ、千萬忝なうぞんする、何なりとも相應の御用もござらば承はるでござらうと嬉しさうな顔して挨拶せらるゝ。こいつが間違ふて、時に軍太兵衛どの、足下の御心術甚だ以て其意得ませぬ、チト心を正直に御持なされ。心のゆがみが見えて甚だ見ぐるしうござるといふたら、どうするで



あらうぞ刀にそり打て、鏝うちならし、忽ち刃傷におよぶであらう。  
ナント人はからだのこと世話してやると滅多にうれしがつてなほ  
す心のせわをする人があると眞黒になつて腹をたて、その心を直さ  
うとせぬは、どういふ拍子の間ちがひで、是ほどまで迷ふたものでご  
ざりませうぞ。是はよその事ではない、御たがひに大敷小敷、色かへ  
品かへこんな間ちがひは得てありたがるものでござります。よう  
御吟味をなさりませ、是がこれ形は人の目にかゝらぬゆるゑ、ゆがんで  
有てもまがつてあつてもくるしうないと、此無分別からおこる事ぢ  
や、是ぢやによつて少しも油断はなりませぬ。(原文のまゝ)

【七九】

失戀の偉人

昔、大江定基といへる博士あり、家は世々文學を以て名あり、祖父維  
時は文を以て参議に任じ、從三位に叙し、中納言に進み、薨じて後、詔  
して從二位を賜ふ、維時の二子齋光は定基の父なりき。定基亦夙に  
家業を繼ぎて文章を善くす、天元中、父祖の功勞を以て藏人に擢んで  
られ、尋で三河守に任ず、定基に愛妾あり、力壽といふ、定基深く愛しけ  
るが、假初の病にてみまかりければ、深く人生の無常を感じてゐたる  
折柄、五月の雨晴れ遣らぬ此頃、一人の容貌いやしからぬ女のいたく  
簞れたるが鏡を賣りに來りければ、あはれと思ひ買ひ取りて見るに、



鏡の裏に一首の和歌あり、

けふまでとみるに涙のますかゝみ

別れぬる影を人に語るな

定基我身に思ひ比べていとゞ涙のとゞめがたく、鏡をかへして様々物のを與へて女を歸しぬ。これより道心をいよくかため、叡山横川の源信僧都の許に馳て飾をおろし名を寂昭と號して行ひ澄ましき。

かくて學行相與に高く、遂に渡唐の志を起されけるが家に年老たる一人の母在り、我もろこしに渡りぬと聞かば、老の波にしづみて

命も危かるべしいかゞせんと思ひながら母の前にいたりて暇を請へば、老母の云ふやう「恩愛別離のかなしみはいかでか思ふべき、されば佛も物の悲しき事には悲母の一子を思ふ事に喩たまふと聞きぬ。われいかでか歎きの心無かるべき。されど、求法傳受の志をばなごか悦ばざらん、かくてこそ佛の御弟子とこそ言ふべけれ」とてことに涙をかくして雄々しくもありければ、法師うれしさ遣る方なく、しばしの別れに母の爲に善を修しける。其の願文に曰く。  
我母は是れ人の世の母にあらず。是れ善縁の母なり。若し萬人頬を緩うし心を苦しめて之を諫むとも、我未だ必ずしも従はず。



若し一親の言を形し色を變へて之れを留めたまは、我何ぞ逆らふべけんや、誠に我を佛道に勸むるは、寧ろ我の慈堂にあらざらんや。

と。げにや人の親の子を思ふならひ、しばしの程の別れをだにも堪へかねる物なるを、猶萬里の波濤をへだて、又も相見るまじき最後の別れを、法の道に思ひをかけて涙を裏む母の心のゆかしからずや。さるほどに、寂照入唐して彼國に入る。時にもろこしは宋の世となりて時の帝は眞宗と申したてまつる。法師を召して種々の物語あり、帝歡慮殊にかなひて圓通大師と號をたまひ、精舎の統管に任せ

られ學徳の譽いよく、高かりけるが、遂に辭世の一偈をとめて彼地に示寂ありぬ。

笙歌遙に聽く孤雲の上  
聖衆來迎す落日の前。

また一首の和歌を詠す。

雲の上に遙に樂の音すなり  
人や聽くらん虚耳かそも。

芳名長へに彼地に傳はるといふ。

愛欲をもつて菩提の種とし、遂に異域に芳名を傳ふ。若きわれら



のまなぶべきめでたき話ならずや。

贈日本僧寂照禮天台山詩

閩清野人

滄波泛瓶錫 幾月到天朝 鄉信日邊斷 歸程海面遙

秋泉吟裏落 霜葉定中飄 爲愛華風住 扶桑夢自消

【八〇】 仇を恩で返した犬

或る若者が犬を飼犬に年が寄つて役に立たぬやうになつたので、捨て、了はうと思つて舟に乗つて河の真中から抛り込んだ。犬は水を泳いで飼主の舟へ這い上らうとするのを飼主は櫂でもつて突

戻し、また上つて來るのを櫂で突き戻すといふ風に遣つて居るうちに、船椽を踏み外して河の中へ陥つて泳ぎを知らないものだから、あぶく、やつてゐる。すると犬は直と主人の帯を咬へて、淺瀬の方へ連れて往つた。それがために若者は危い一命を取留めた。



處世訓

【八二】 處世は傘の如くせよ

瑞軒は徳川の初期材木の受負をして萬金を重ね、海上運輸の便を圖り、治水に功ありし人である。元祿十三年六月八十二で世を去つた。

瑞軒ある人に、夫れ人の心は本小さく細かく持ちて、其業に至りては大きく擴げ、畢竟傘のやうに心得よ。傘は、本ろくろの小さきより

自由に大きく擴がり、いつにてもたゞまれるものである。此味を能く心得ずは、大立身は成り申さぬ。と語つたといふ。味ある處世訓である。

【八三】 三の物に惚れよ

初代薩摩治兵衛翁は、丁稚より立身して日本の番頭鑑の大關と稱せられ、木綿問屋となつて一代に百數十萬金を得た人である。この人の處世訓にいふ、「土地に惚れ。商賣に惚れ。女房に惚れる。この三つの者に惚れなければ立身出世は出来ませぬ。」



秋の夜ばなし

【八三】 秋の詩歌

渡るを聴きては  
いつの世よりか秋は悲しと言ひ初めたか。蕭颯たる涼風梧葉を

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

敏行

うちつけにもものぞかなしき木の葉ちる

秋のはじめをけふぞと思へば 能定

と歌人の心を痛ましめ照る月を仰ぎては千々に悲しき想ひに泣く、  
夜色沈々たる洞房の中簾外は梧桐の影淡き所

秋霜欲下手先知 燈底裁縫剪刀冷 白樂天

空閑の怨みに泣く若き寡婦の心を偲ばしむ。秋はしかく悲しき  
ものであらうか。

二

林間に酒を暖めて紅葉を焼き石上に詩を題して綠苔を拂ひしは



王朝の風流人が喜びし秋興である。秋高うして馬肥たり、蹄を城北の野に印して、鐵鞭に金風を斬つて快とするは當世風の武人の興がるどころ、

久病曠心賞、今朝一登山、山秋雲物冷、稱我清羸顏。

白石臥可枕、青蘿行可攀、意中如有得、白樂天

多情多恨の病詩人さへ、風物清き満山の秋に心身の爽快を覺ゆ、且つは、瑞穂の稻に黄金の波の美しきを眺め、露滴らんばかりなる果實の豊かなる秋のいかに快き。西の洋の詩人の歌ふを聞けば、霧罩むる秋。みのり豊かに、果熟する恵の日の友。其の友と謀

りて、藁葺の軒端を遶る葡萄の蔓に、果を授けんとはすなる。土小屋の苦むす木は心までも熟せる、苹果の實に撓み、葫蘆はふくやかに、榛樹は殻をふくらませて内に甘き實を充すと、秋はたゞ蕭索たるものではない。

三

若し夫れ

秋の夜の長くなるこそ嬉しけれ

讀む巻々の數をつくして

の明治天皇の御製を拜誦しては、そらるに修養の好季たるを覺ゆる



ではないか。

【八四】

七 夕

さらくと庭の小笹をおとなふて涼風軽く我簷端を敲く夕門を開けば高樹影淡く月蒼々として空に一抹の銀河が淡く連なつてゐる。

舟よする天の川邊の夕ぐれは

涼しき風や吹き渡るらん(西行)

かゝる時想を遙に彼の空に運ばせては人は言ひ知れぬ悠久の懐

に打たれて其處に我理想の樂園を求めて永へに住むべきことをあこがれるのである。されば彼の熱砂身を煨く印度太古の民は、日没し月蒼くして椰子の葉末に風そよぐ時苦熱の我が世に萬斛の涼味を下す源を天の彼方に求め火中に死したる尊き苦行者と戰場に死したる勇士の生るべき浄土を彼の銀河の邊に定め昔希臘の人々は白く淡く濁れる如き光を見て銀河に「乳の如き道」の名を與へて彼處こそ我等の靈魂が天國に達すべき道なれと信じ又た瑞西の民は銀河の光が春の夜には地平線上に低く其の光も露の爲めに蔽はれてゐたのが秋冬の夜に明かに現はるゝを見て「冬の道」と稱した



といふ。東西各殊なれる想のうち、支那の天の河牽牛織女の傳説は彼の張文潛の「七夕の歌」によつて知ることが出来る。

其の歌にいふ、  
河東の美人天帝の子。機杼年々玉指を勞し。雲霧の紫綃衣を織り成す。辛苦歎無くして容理へす。帝獨り居て與に娛しめること無きを憐れみ。河西の牽牛夫に嫁與す。嫁して従り後織紙を廢して綠鬢雲鬢朝暮に梳る。歡を貪りて歸らず天帝怒る。責め歸して却て來時の路を踏ましめ、一歳に一たび相見えしむ。七月七日橋邊の渡別る、事多く會ふ事少にして知ぬ奈何ぞ。却て

憶ふ從前歡樂の多かりしことを。

此の傳説は我日本に傳はりて七夕の祭となりて笹の葉に色紙を翻らせて兒童を喜ばせ牽牛織女の哀詩に詩人佳人の涙を絞らせる。

ひと夜寝て絶えぬおもひや七夕の  
夢のわたりの天の河はし(通村)

銀河の傳説多きが中に凡そ斯の如き優美な詩的のものはなく而も一歳に一たび相見えて往事の歡樂の多かりしを憶ひ泣く織女を假りて密月の甘きに酔ふて任重き夫婦の意味を忘れなどの森嚴なる



教訓を若き夫婦に與へたものと見るこゝが出来るのである。  
涼風吹く夕羅々たる星宿を望んで、悠久の懐あらん人は静かに此  
の意味深き織女のご事に意味深き教訓を味は、んは、實に秋の夜を  
更に趣多からしむるものであらう。

【八五】

阪東の荒夷（熊谷直實の二）

歸去來分歸去來。西方淨土白蓮開。陣々香風吹不散。逍遙快樂

紫金臺。（題白蓮淨社）右街鹽義從正

數多い日本武士の英雄的行動の中にも、殊に哀れ深い名残を留む

るものは、熊谷次郎直實の物語であらう。直實は人も知る如く、未だ  
前髪の昔から、弓矢取りて人を殺す外には道を知らなかつた阪東の  
荒夷で、平治の亂には、悪源太義平に屬して、郁芳門の一戦には、十六騎  
の一人どうたはれ、治承四年、石橋山の合戦には、平家の方人として、拔  
群の手柄あり、後、源氏の幕下に屬して、わが子小次郎と共に、平山季重  
と先陣を争ひ、音に聞えた播磨大道の渚に下つて、須磨の浦邊に、花の  
若武者教盛を打つたといふ名高い事蹟は、皆人々の稱する所である。  
所が、これほどの勇士が、一朝覺る所があつて、佛門に歸して以來の行  
ひといふものは、殊更に對照の妙を極めてゐるので、阪東の荒夷とし



ての彼と、法然門下の一道心としての彼。戰場に馳驅して大太刀を振り翳して、人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬つた彼と、一介の黒衣に珠數爪繰つて、ひたすらに自己の弱少を歎いて大悲の救済を仰ぐ女々しい彼。功名に飢え罪惡に苦しんだ彼と、法悦に満ちて感謝の日を送つた彼。斯様に彼此對照し來つた其係を思へば、信仰の門に入つた人と入らぬ人との差別の程が窺はれて殊勝な教訓が得られることである。

これを譬ふれば、未だ信仰を得ずして浮世の罪惡場裡に奮闘してゐるものは、宛かも冬の日に荒野を小迷ふ旅人のやうで、信仰の中に

生活する者は春の花園を逍遙するやうなものであらう。彼は雪に降られ風にさらされ、飢に苦しむ、疲れ果て凍切つたる身を寄するよすがもない孤獨に泣き、これは融けたる春光を浴びて心適くばかりの長閑さを味はふ、聞くに鳥の歌あり、眺むるに花あり、天地唯これ極樂の園である、永日の樂は不盡の泉である。彼れ熊谷は寂寥の荒野から出で、此の永日の春の喜に入つたものである。

【八六】 春 燕 (熊谷直實の二)  
浮世生身事若何。猶如春燕累巢。波波役役營家計。不如隨分。



須磨の浦に花の盛りの敦盛を打つて徐ろに人生の無常を感じ弓矢取る身の罪深きことを覺つた彼は鎌倉歸東の後久下權守直光と地所の争あり直實直光御前に對決したが打物取つては一人當千の名を得た猛者もあはれ辯論にかけては三歳の小兒にも等しく理を非に枉げて敗訴となつた。何事も一途に率直な彼は憤懣遣る方なく髪を除つて遁世した。髪を除つて過去の吾身を顧り見れば宛かも春燕の巢を作るが如く唯罪惡の塊を積み累ねんが爲めに波々役々として動いて來たのである。戦場の功名といひ手柄といふ

も畢竟我罪惡の塊の一片であつた。あゝ今の吾身は之れ罪惡の塊である。人を殺す外には何の道も知らなかつた。智眼一分の明もなく冥より冥に入り苦より苦に入つて何時を何時とて解脱の道も知らなかつたを有難や法然門下の求道者となり彌陀の大悲に救はれた今の我身は正しく是れ極樂の聖衆の一人ではないかと彼は身に餘る法悦を堪えられぬまでよろこんだ。後に西山上人の門に入つた宇津宮頼綱は家子郎徒濟々として武藏野を過つて居ると昔の弓矢の友今は出家の熊谷と逢ふた。いみじく大勢にておはするものかな。但しいかに多くとも無常



の殺鬼はふせぎがたくや侍らん彌陀如来の本願にて念佛する者  
をば悪道におとさすむかへとり給へば一人當千のつはゝものに  
もなをまさりたるはこれ念佛なりかまへて念佛したまへと申し  
るが肝にしみてぞ覺へける。  
此の縁によつて他力の信仰を得た頼綱が後あさかの山に詣でた時  
に讀んだ『古のわれとは知らじあさか山』の歌は、信後の生活のよ  
ろこびをうたふたものである。

【八七】

阪東の阿彌陀佛（熊谷直實の三）

超世の悲願聞きしより。われらは生死の凡夫かは。有漏の穢心  
は變らねど。心は淨土にすみあそぶ。  
まこと安心證得の上は、睡つて一夜を明すも、覺めて一日を暮すも、皆  
これ大悲の懐の生活である。熊谷は、一たび大悲攝取の光明に浴し  
てから、彼の身も心も一變して、今は淨土の聖衆となつた。無常に泣  
き、罪惡に泣いた悲しい過去は跡方もなくて、唯だ心適くばかり樂し  
い現在に生き、花の未來に生きてゐる。  
ある時は月輪殿の大床に伺候して『往生極樂の當來の果報尙遠  
けれど、忽ちに堂上を許されて今生の果報を得たり』と喜びある時



は、西に向ふて後見せぬ剛の者と誇る。宛然、これ菩薩の遊戯三昧、昨日の阪東の荒夷が、今日阪東の阿彌陀佛とさへうたはれて、どこしへに盡きぬ永日の春を喜んだ。  
あゝ、信ある者は幸である。攝取の光明に入る者は幸である。願はくは吾世に荒野無からしめよ。大光普く被らしめて永日の春あれかし。

【八八】 燈籠大臣 (源平盛衰記抄補)

小松内大臣重盛卿は、人も知る平相國清盛の長子にて、智勇共に一

門の長者と稱へられ、そのむかし、白河殿の戦には、悪源太義平と紫震殿前に戦ひて、七たび櫻樹を周りて馬を花桶の香に狂はせ、絶倫の武勇を世に唄はるゝばかりか、父相國の専恣を矯め、一門の暴横を抑へて、能く主上の神聖を汚し奉らず、あはれ平族をして朝官たらしむる者六十餘人、采邑天下に半し、朝政盡く決するの盛大を致せるもの、實に此の大臣の力の致す所と世に其の徳を稱へしめたり。  
此大臣二世の悉地をけさん爲に、靈神靈社に志を運び、佛法僧寶に首を傾け給ひけり、さればにや先祖に拜任の例なかりける大臣の大將を極めて丞相の位に登り給へり、親に先立つ御歎ばかりや御心の



に懸け給ひけん、今生の榮花一として、闕け給はず、又後生の苦か悲みて、來世の營、他事なかりける、其中に有り難き事と世に聞えけるは、大臣の常に住み給ひける所をば、東へ十二間、南へ十二間、西へ十二間、北に十二間の屋を立て、四方に四十八の間を點じ、一方の十二間に十二光佛を一體づゝ立て奉りたりければ、四方に四十八體の十二光佛御座しけり、其御前ごとに常燈を燃されければ、四十八の燈爐あり、晴夜の星の隈もなく、澤邊の螢に似たりけり、上は二十歳下は十六歳、色深く身盛に姿人に勝れ形類なき美女を四十八人擇びて、常燈に一人づゝ付け給ふ、油を添へ燈を挑げてぞ置かれける、齡二十にも

餘りければ、取替へ取替へ居られけり、日没の時に成りければ、四十八人の女房、達衣、裝花を折り、蘭麝の芳を新にして、日没靜に禮讚し、念佛貴く唱へつゝ、四十八間をぞ廻られける、念佛禮讚終りぬれば、彼の女房達六人づゝ番を結びて、鼓銅、鉞子をはやしつゝ、今様謠ひて、又彼の四十八間をぞ廻りける。

心の闇の深きをば、燈籠の火こそ照すなれ、彌陀の誓を憑む身は、照さぬ所はなかりけり。と別の詞を交へず、是ればかりを折返し折返し謠はせて、我身は中臺に座し給ひ、是れをぞ聽聞せられける、是れや此れ極樂世界の菩薩聖



衆の彌陀覺王に奉仕して、或は説法化行し、或は伎樂歌詠して、佛の化儀を助くらんも、かくやと思ひ知られたり、餘所迄も哀に貴く覺へつゝ、身の毛も豎つばかりなり、かゝりし故に、此大臣を、異名に燈籠の大臣とぞ申しける。

酒

【八九】

大酒飲の辭世

もろこしの劉伯倫は酒功の賛を作り、白樂天は酒徳の頌をあらはしてこれを愛し友としぬ。まことに一升は夢のごとし、五合は幻の如しとはかなく醒ることを歎き暮した可右衛門といふ男、浮世を酒に暮して樂んだが、つひに酒毒でいよく臨終といふ時に、近親の者を集めて言ふやう、我この病で死ぬることは一升の本望で、五升も



安樂と安心決定して居る。それで、酒桶を棺にして、酒の粕にてよく詰り、手向の水には酒を濺いで呉れよと斯ういふ辭世を遺した。われ死ば酒屋の藏の桶の下

破てしづくのもりやせんもし

【九〇】 苦しい言譯

義政將軍の時、洛中洛外に酒を禁じた事があつた。萬阿彌といふ茶坊主が何處で飲んだか、ぶぶんに酔ふと、手足も顔も、赤漆で拭つたやうに眞赤になつて御前に跪づいた。將軍が御覽になつて、おの

れは酒を飲んだのかと仰しやると、いやあまり寒いのでツイ前刻火にあつたのでございます。嘘を言ふ勿。熟柿臭いではないか。さうでもござりませう。柿の木をたいてあたりましたので。

【九一】 上に着ようか下に着ようか

神無月の半木の葉の散る寒空に、酒賣る店の門に一人の男が、一枚着た布の帯を解いて「上に着ようか、下に着ようか、下に着ようか、上に着ようか」と頻に考へてゐたが、どうも思ひ切つた様子で「下に着よう」と飛込んで、おいこの綿入で一杯飲まして呉れど、五六合



引掛て裸で出て行つた。

家庭のをしへ

【九二】

三

益

わが身朝夕飲食の奉養をかろくして身をば勞働すべし、おごりて酒食の美を好み、おこたりて身を安逸にすべからず、おこたらず、かくのごとくすれば、第一徳をやしなひ、次に身をやしなひ、次に財をやしなふ三の益あり。(家道訓)



【九三】

陶淵明の家庭訓

菊で名高い陶淵明が、彭澤の知事となつた時に家族を家に残して自分は一人の下僕を従へて任地に赴いた。後其下僕を送り返した時に我子に與へた書に曰く  
汝旦夕の費自給する難しと爲す、今此の力(下僕)を遣はして汝が薪水の勞を助く、此も亦人の子也、善く之を遇すべし。

【九四】

貧に處する道

七月十二夜、枕上家計を思ひ窘しむこと甚だしく其の處に堪えず、

反覆して之を思ふて其の方を得ず、日晏くして未だ起す、久しくして方に之れを得たり、蓋し亦別に巧法無し、只分に随ひ用を節し、貧に安んせん而已。誓つて寒飢死すと雖も敢て初心を易へずと、是に於てか欣然として起つ。(明儒學案卷一、吳康齋の言)

【九五】

才兵衛嫁を作る

遠州のある所に、才兵衛といふ爺さんがあつた。其嫁が朝寢の癖があつて、容易に治らない。嫁も困り家内中の者も困つてゐたが、才兵衛はすこしも小言を言はないで、朝早く起きて手水を汲み、下駄を



揃へ嫁の爲る事を皆代つて爲た。嫁は初めのうちは愧ぢ、中ほどは恐縮し、終に感奮して早起となつたといふ。

後、才兵衛は人に語つていふ、私の所の嫁は私が作りましたと。

【九六】

めぐみのひかり

はし が き

今、日本の思想界で持囃されて居る泰西の大思想家はせいへば、新しい所では哲學ではベルグソンにオイケン、文藝ではバーナード・ショウに、オスカア・ワイルドといふやうな人達である。予が本欄を擔當して、海の彼方の人達が驚らし奥るゝ思想或は作品をこゝに移して、諸君に新資料を呈せんとするに當つては、

此の新時代に於ける新思想の權威たる是等の人達から何か得たいものであると思ふて、先づワイルドの作品を読んで彼の物語集から得たのがこの「幸福な皇子」である。

元來、本篇は「お伽ばなし」風のものであるが、其の内に含まれたる思想といふものは、實に「教會の中に無い愛」まで稱揚せられた純潔至高な人道、慈悲博愛の精神の鼓吹であつて、市の上に空高く立てられた皇子の塑像の慈悲博愛の行爲に化せられて、無邪氣な、浮氣な燕が其の塑像と共に人道の犠牲となるさいふ所、まことに讀んでゆくうちに楚々として人を動かすものがある。所々原文を翻譯し、又は原作の筋を述べて、附するに記者の註釋的修養談を以てする。

(一)

ある市の空高く、高いく丸柱の上に、此の市を飾つてゐる立派な



皇子の塑像が立てられてあつた。その塑像は、悉皆純金の薄い片で鍍金がしてあつて、兩眼には二つの青玉が光り輝き、腰の劔の柄には、大きな紅玉がキラ／＼としてゐるのであつた。

市の人々は、この塑像を「幸福な皇子さま」と呼んで、大變敬慕してゐた。何でも算盤玉の上から値打をする市参事會の某でさへ、「あゝ美しい風見の雄の鶏のやうだ。風見の鶏のやうに、實用には適しないが」と褒める（西洋では風見は往々雄の鶏の形で拵へる）。夜泣いてゐる幼い子供を賺すのに、賢い母親は、「此の子は何うしてあの幸福な皇子さまのやうになれないんだらう。あの皇子さまはどん

な事にもお泣きなさらないぢやありませんか」といふ。

うき世の苦勞に失望落膽してゐる男が、この不思議な塑像を眺めながら、「此の世界に、この皇子のやうな、こんな眞個に幸福な人がゐるのが嬉しい」といふて喜ぶ。哀れな孤兒院の子供は皇子を仰ぎ見て、「あゝ天使さまのやうだ」といつて感嘆する。こんな風に此の「幸福な皇子」の塑像は市のあらゆる人達に懐慕されてゐたのであつた。

ある夕暮に、一羽の燕が此の市の空へ飛んで來た。彼の友達はい既に五六週間も前に、暖かい埃及へ往つて了つたのだが、彼は美しい河



岸の蘆と愛し合ふて別れを惜しんでゐたために、後に残つてゐた若い此の燕の心は、断えず戀に燃えた春の初めに此の蘆と始めて逢ふてから夏中愛し合ふてゐたのであつたが、友達が往つて了ふと急に寂しくなつて、そして燕は蘆に飽が來はじめた。

「彼の女は男たらしの浮氣者ぢやないかしら、何時でも風とふざけてゐるから。」と思ふと、其の戀が馬鹿らしいやうになつて來る。

「お前は私と一緒に暖かい國へ往かないか」といつても、蘆は頭を振つてゐる。「それぢやお前は私をおもちやにしてゐたのだね。私はもう彼の暖かい埃及の金字塔のある所へ往つて了ふよ。左様なら」

と燕は蘆と別れて了つた。

その日は終日空を翔つて、夜此の市へ着いたのである。

「何處か好い場所があればよいが」と見廻してゐると、眼に着いたのは、ちやうど彼の皇子の塑像であつたのである。彼はちやうど皇子の脚の間へ降りた。「あゝ、美しい所だ、私は黄金の寢床を持つてゐるんだ」と四邊を見廻しながら、靜かに獨語を云つて、眠る用意をした。さて、ちやうど頭を翼の中へ突込んで、眠らうとした時に、大粒の滴が一つポツリと落ちて來たのであつた。「これは奇體だ、空模様は別段變つてもゐないし、星が輝いてゐるのに、それに雨が降るとは……」とい



ふうちに又ポツリと一滴落ちて来た。

「雨が防げないちや、この塑像の下にゐても仕方がない、何處か好い場所を探さなくてはならぬ」と立たうとして翼を擴げやうとする、又もやポタリと三度目の滴が落ちて来た。燕は思はず顔を舉げて上を見た。其の時彼は思ひの外の物を見た。彼は何を見たのでありませう。

「幸福な皇子さま」其の幸福な皇子の眼に涙があつた。涙がその黄金の頬を傳ふてゐるのでありました皇子の顔は涙に濕つて露に輝く朝日のやうに美しい。それを見た燕は氣の毒さが胸一杯になつ

て来た。「あなたは誰ですか」と燕がたづねた。「私は幸福な皇子だ」「それでもあなたは泣いてゐるぢやありませんか、あなたは私をすつかり濡らしてしまつたんですよ。」と燕が云ふ。

「私が生きてゐて人間の心を持つてゐた時には、私は涙といふものがどんな物だか知らなかつた。帝王の子と生れ、何の心配もない御殿の奥に住居した、そこには悲哀といふものが入る事を許されない。晝は友と打連れて花園に遊び、夜は大廣間で舞踏をする。花園の周圍には長い／＼塀がめぐらされて、人民の住所と宮殿とを隔てゝゐるが、私は其の塀の外に、どんな所があるかは知らうとしなかつた。



周囲の物は總て美しいものづくめであつたのだ。私の臣下共は私を「幸福な皇子さま」と呼んだ。若し浮世の快樂が幸福であるならば、まつたく私は幸福であつたのだ。そういふ風に快樂の中に私は生きながらへ、そういふ風に快樂のうちに私は死んだのである。さて私が死んだので、人々は私をこゝに据てゐる。こゝはこんな高いから、此の町のあらゆる醜惡とあらゆる不幸が能く見える、それを見ては私の心臓は冷たい鉛で拵へてあるのだが、泣くより外は仕方がないのだ。」と皇子の塑像は世の中に何の不足もなく暮してゐる人達、即ち貴族とか富豪とか云はれる人達には、世の憂き節は解らぬ

が、一步世の中の實社會に立ち入つてみると、そこに云ふに忍びない罪惡がある。そこに憐れ至極な人達が居る。それを思へば泣くより外はないと云ふ、これ作者が冷たい金で拵へた皇子の塑像を借りて弱者を憐れめよと説く所である。皇子は低い氣持の佳い聲で言葉を續けた。

「遙か向ふに遙か向ふのあの狭い通に、みすばらしい家がある。一つ明いて居る窓から見ると、一人の婦人が坐つて裁縫をしてゐる。彼女の顔は瘦せ殺けて、手は赧くて荒れてゐて、手は針でつゝいた跡だらけだ。彼女は裁縫師である。そして今宮中の女官の中で一番



美しい女が、此次の舞踏會で着る曠衣の上衣に美しい花の刺繡をしてゐるのである。部屋の間には、此の縫物師の女の幼い子供が病氣して寝てゐる。子供は熱病を煩つてゐるので、蜜柑が欲しいのだが、貧しい彼の母親は、河水より外に遣る物はないのである。それで病人の子供は泣いてゐる。燕よ、燕よ、ねえ燕お前は私の此の劍の柄飾の紅玉を外して持つて往つて遣つてお呉れ、私の足は此の臺に密附してゐるので動けないのだから」

夜の舞踏に着るために、花美しい刺繡を爲す宮中第一の美しい女官、貧に蹙れ果て、針の後だらけの手で、それを縫ふ女、傍には熱病に罹

つて蜜柑が欲しいと泣いてゐても、河の水しか遣れないといふ。まことに何といふ對照でありませう。これが世の中の有様である。

しかし、未だ物の哀れを知らぬ燕はさしてこれが哀れとも思はない。「私を埃及で待つてゐて呉れてゐるんです。私の友達、あのナイルの河の邊を飛び廻つてゐて、大きな蓮華とお話をしてゐるんです。おつ、け友達は偉い王様のお墓の傍で休みませう。王様は彩色をした柩の中に入つて、黄色い着物や繻子をして香料で包まれて、木乃伊になつて居られます。王様の頸の周圍には蒼ざめた緑の礫石の鎖がついてゐて、其手は萎んだ木の葉のやうなんですよ。」といふ。



「燕よ、燕よ、ねえ燕、お前は一晚だけで好いから私の處にゐて、私の使になつてお呉れ。あの子供はあんなに熱で渴へてゐる。そして母親はあんなに悲しんでゐるではないか。」

「私は男の兒は好かないんですよ。去年の夏、私の河の傍を飛んでゐると、水車小屋に亂暴な子供が私等に石を投げました。當りはしなかつたが、私等は高く飛んで逃げました。ひどいぢやありませんか。」など、燕は云つたが、幸福な皇子が悲しさうにしてゐるので、どうも燕は心を動かした。

「どうも此處は寒い所です、ね、だが今夜だけこゝにゐて、あなたのお

使をしませうよ」「どうも有難う」と、どうも燕は、幸福な皇子の像の劔の柄から大きな紅玉の寶石を抜き取つて、嘴に銜へ市の上を飛んで往つた。

燕が王様の御殿の傍を通ると、舞踏の響がする。一人美しい娘が戀人と露臺に出て、甘い戀物語をしてゐた。「私は、こんどの舞踏會に衣裳が間に逢へばよいがと思ひます。私は、美しい時計草を縫ひ取るやうにと云ひつけて置いたのですが、裁縫師が怠けてゐるものですから」と、女がいふてゐた。

金持の市で、錢を秤で秤つてゐるのを見たりなどして、燕は彼の裁



「燕よ、燕よ、ねえ燕、お前は一晚だけで好いから私の處にゐて私の使になつてお呉れ。あの子供はあんなに熱で渴へてゐる。そして母親はあんなに悲しんでゐるではないか。」

「私は男の兒は好かないですよ。去年の夏私の河の傍を飛んでゐると、水車小屋に亂暴な子供が私等に石を投げました。當りはしなかつたが、私等は高く飛んで逃げました。ひどいぢやありませんか。」など燕は云つたが、幸福な皇子が悲しうにしてゐるので、どうも燕は心を動かした。

「どうも此處は寒い所です、ね、だが今夜だけこゝにゐて、あなたのお

使をしませうよ」「どうも有難う」と、どうも燕は、幸福な皇子の像の劍の柄から大きな紅玉の寶石を抜き取つて、嘴に銜へ市の上を飛んで往つた。

燕が王様の御殿の傍を通ると、舞踏の響がする。一人美しい娘が戀人と露臺に出で、甘い戀物語をしてゐた。「私は、こんどの舞踏會に衣裳が間に逢へばよいがと思ひます。私は、美しい時計草を縫ひ取るやうにと云ひつけて置いたのですが、裁縫師が怠けてゐるものですから」と女がいふてゐた。

金持の市で、錢を秤で秤つてゐるのを見たりなどして、燕は彼の裁



縫師の家に来て、内を眺めて見ると、病人の子供は熱に浮かされてゐるやうで、寝床の上に苦しんでゐるのに、母親は既う疲れ切つてそれさへ知らずに睡つてゐたのだ。燕は、卓子の上に彼の寶石を置いて、子供を額を翼で煽いでやつた。子供はさも涼しげに喜んで、すやすやと快く睡つた。

燕は「幸福な皇子」の所へ還つてその話をして「奇體ぢやありませんか。こんなに寒い晩なのに、私は大層暖かく思ひます。」といふ。「それはお前が善い事をしたからだ」と皇子は教へた。まことに善い事をした時は、寒い時にも暖かく、暑い時にも涼しい氣持がする。

これが善事の報である。

無邪氣な燕はこんな事を考へてゐるうちに眠つて了つた。

(二)

明る日、燕は河で行水をして、今夜埃及へ行かうと大元氣で決心した。市の人達は冬に燕が居るので不思議に思ふて、取々と噂をする。燕はおかしくて仕方がない。さて、愈々夜になつたので、此の月明に旅立を爲ようと、皇子に暇乞をする。

「燕、ねえ、燕、もう一晚私と一緒にゐて呉れないか」と皇子がいふ。燕は埃及で自分の友達が待兼てゐる、明日は友達と一緒に大きな瀑



布へ飛んで行く。河馬は蘆や蘭の間に横たはつてゐる。花崗石の玉座の上には、メリンの神が座つてゐる。神は夜通し星を見詰めてゐる。正午になると、黄色な獅子が河のほとりへ水を飲みに来るなど、面白い埃及の話をして、早く立ちたいといふ。

けれども燕よ。この市の遙か彼方の屋根裏に、若い男が住んでゐる。あの男は、紙片で一杯になつてゐる机に凭れてゐる。傍の硝子の杯には、一束の萎れた莖がはいつてゐる。あの男の毛は縮んで唇は柘榴のやうに赤くなつてゐる。あの男は大きな夢見るやうな眼をしてゐる。あの男は、芝居の太夫元から頼まれて、芝居の脚本

を書いてゐるのだが、もう寒くて書き切れないのだ。火鉢の中には火とてなく、その上飢えて気が遠くなつてゐるのだよ。」

「それぢや、もう一晩居りませう。外の紅玉を持つて行くんですか」心の底から善良になつた燕は斯う答へた。

「噫！ 私はもう一つも紅玉がない。残つてゐるものは眼だけだ。私の眼は一千年も前に印度から持つて来たといふ青玉だ。二つのうち一つ持つて往つて彼の男に遣つてお呉れ。あの男は此の寶石を賣つて、食物や炭を買つて脚本を書いて了ふだらう。」

「皇子さま、あの眼を啄き取るなんて、そんな事が何うして出来ませ



う。」と燕は泣き出した。「私が言ふ通りにしてお呉れ。」と強て皇子の命令に燕は皇子の片眼を抜いて、彼の小説家の机の上に置いた。飢と寒さに失神してゐた彼の小説家は、萎んだ董の傍に置かれたる其の青玉を見て驚喜した。そうして斯う叫んだ。あゝ私の價値が世人に認められて来たんだ。これは私の崇拜家が私に贈つて呉れたんだ。サア私は脚本を書いて了へる」とさも嬉しさに堪えぬものゝやうであつた。

燕は歸途に、大きな船の帆柱に止つて、水夫が船倉から綱で大きな箱を手繰り上げてゐるのを見たりなどして、いよく今夜は埃及に

往かうと決心をして、皇子の處へ歸つて暇を告げると、もう一晩居れといふ。燕は答へた。「時候は冬です。そうして冷たい雪はもう直に此處へ降つて來ます。埃及ちや、日はぼか／＼と緑色の機欄の木に暖かく照つてゐます。鰐魚は堀の中から物臭さうにそれを眺めてゐます。私の友達はお寺の軒に巢を造つて、淡紅色と白の鳩が友達を眺めてゐます。皇子さま、私はあなたとお別れをしなければなりません。しかし、私はあなたを決して忘れないたしません。來年の春になりましたら、あなたが恵みなさつた代りに、美しい寶石を二つ持つて歸つて上げます。私の上げる紅玉は、紅の薔薇より赤く



青玉は大洋よりも青いんですよ。」

それでも皇子は、下の四辻を眺めて、そこにマツチ賣の小娘が、マツチを溝の中に落として、すつかり役に立たなくしてしまつてゐる。家に歸れば父親に打擲される。彼女は泣いてゐる。それに彼女は靴下も穿いてゐない。帽子も被つてゐない。私の眼を啄き取つて、それを彼女に遣つて呉れといふ。燕は私はあなたの傍にもう一晩とまるけれども、眼を啄き取る事は出来ない、そうすればあなたは盲目になるといつたが、皇子はきかない。燕はどうも、その通りにした。

燕は皇子の傍へ歸つて、「あなたは盲目になつたから私はもういつまでも、あなたの傍に居りませう」といつた。「いやお前はもう埃及に往つてお呉れ」と云つた。「私はあなたの傍にいつまでも居りませう」と、燕は皇子の脚の處で眠つた

翌日、皇子の肩の上に坐つて、方々で見に来て来た異國の珍らしいお話を、皇子を慰めた。皇子はそれを聞いて了つて

「可愛い燕よ。お前は私にいろんな不思議な話を聞かせて呉れた。けれども世の中には男や女が苦勞してゐるほど不思議な事はなく、世に不幸、ほど神秘的な物はない。それを私に話してお呉れ。」そこ



で燕は市の上を飛んで往つて、市の出来事を眺めて見ると、ある金持が立派な家で婚禮をして歌ひさやめてゐるのを見た。すると其の家の門の傍には乞食が立つてゐた。暗い裏通に飛んでいつて見ると食に飢たる子供等が蒼白い顔をして、往來の方を茫然と眺めてゐる。橋の下には二人の乞食の子が腕で抱き合つて寝てゐて、互に暖め合つてゐた。「腹が減つて仕方がない」と泣いてゐる。すると橋番は「お前達は此處で寝てはいけぬぞ」と怒鳴りつけた。子供は仕方がないし、雨が降つてゐる中を、何の當度も無くどぼどぼと歩いて行つた。

燕は歸つて此事を皇子に話した。「私は純金で身體を蓋はれてゐる。お前は一片づゝ此の金を削いで此の市の貧乏人に遣つてお呉れ。生きて居る者は金が自分を幸福にすると思つてゐるから」と皇子の命令に燕は薄い純金を啄き取つて貧しい人達に分けて遣つた。すると灰色の顔色をしてゐる子供等の顔はだんぐと蓋薇色が増して来て、「私達はお腹が大きんだ」と言つて喜んだ。其の代り、皇子の身體は全身光澤の無い灰色になつて了つた。雪が降り、霜が降り、家々の軒からは劔のやうな氷柱が垂れて来た。それでも憐れな小さい燕は皇子の傍を立去らうとはしなかつた。



彼は心深く／＼皇子を愛してゐたのである。遂に彼は自分が死にかけて居ることを覺つた。やつと一度だけ皇子の肩へ飛び上るだけの元氣だけしか無くなつた。

「さよなら皇子さま、あなたの手に接吻する事を許して下さい」と彼は叫いた。

「燕よ、私はもうお前が埃及へ往つて呉れる事を嬉しく思ふぞよ。お前は餘り長く此處に止り過ぎた。私の唇に接吻をしてお呉れ、私はお前を愛してゐるんだから。」と皇子がいふ。

「私はもう埃及へ往くんぢやありません。私は死の家へ往くんでは

す。死は眠の兄弟ぢやありませんか。」そう言つて彼は「幸福な皇子」の唇に接吻をした。そうして、皇子の脚下に墜ちて死んでしまつた。

其の瞬間に、妙な響が塑像の内部に起つて、何か碎ける音がした。あゝ、それは皇子の心臓が二つに破れたのであつたのである。

(三)

ワイルドの「幸福な皇子」の梗概はザットこんなものである。一篇のお伽ばなし、みたまものではあるが、まさしくこれ、人道の剣で人の肺腑を刺すやうな諷刺である。富貴榮華の人達には世態の眞は



解らぬであらうが、榮華の壁一重隔てゝは、そこには不幸に泣く者が一杯である。歡樂宮殿の舞踏の曠着は、病む子に蜜柑も遣る事の出ない程、まづしい女の手で縫はれてゐる。人々が面白おかしく見る芝居は、飢につかれ寒さにこゝえた不遇の文士の手にかかれてゐるのである。瀬戸に咲く花あれば、門邊に食を乞ふ乞食がある。これが世の常ではありませんか。これを考へては誰か慈悲善根の心が起らぬ者はありませう。

ワイルドは、此の物語によつて之を教へた。さすがの浮氣な無邪氣な燕も皇子に化されて、我身を犠牲にして喜んで清らかな崇高な

愛のために死にました。燕は此の世では寒さに死にました。けれども彼は永久に、極樂の園に囀るべきものであります。

慈悲、愛情、犠牲の高尚な情念を修養するために、家庭の語草とし、まことに佳い話ではありませぬか。

【九七】 慈悲の乳

皆さんお聞なさい。面白い西洋のお話であります。

西洋の愛蘭土の緑の草が茂つて居る田舎の土地に、小さい村がありました。氣候がよし、人が壯健なものですから、其村は何の家も何



の家も子澤山でありました。職業はといへば皆百姓であります。何の百姓家にも、いちばん少くて六人、多くて十二人位もありました。所がある時、大層な飢饉の年に、怖ろしい熱病が流行いたしました。飢饉と熱病がまるで二疋の眞赤な狼のやうに、國中を荒れ廻つてゐた時に、その飢饉と熱病は此の村をも襲ひました。此の小さい村の人達が眼を覺ますと、家内中の者が顔見合せて、屹度斯ういひました。

「これより悪くなるやうな事はありますまい。けれども、さうはゆかないで、だん／＼悪くなりました。畑のお薯は一つ残らず萎びて

しまひ、納屋の牝牛といつたら、只一匹残つただけで皆死んでしまつた。その残つた牛は、村中の赤ン坊にお乳を分けて遣るのに大變忙しかつたので、大層自慢をして、あまり秣を食へ過た故で病氣をして死んでしまつた。

さて、このいちばんおしまひの牛が死んでしまふと、愛蘭士の此草緑なる野の人々は、皆大層困つてしまひました。といふのは、子供が澤山ある上に、飢饉で食物が無いから、母親は皆お乳が出ません。赤ン坊のためには、唯一つの命の乳を呉れてゐた乳牛が死んでしまつたから、男も女も泣きました。赤ン坊も飢しいので泣きました。其



時の事、まことに不思議な事がありました。

ある日、母親達が、ひもじさに泣く赤ン坊に取巻かれて、小さな、かわい者を瘦せ殺けた胸に、ひしと抱いて、戸口に立つてゐますと、世にも不思議な一匹の牝牛が、しづしづと村の真中を歩いて來ました。

その牛の角は、象牙のやうに綺麗でありました。全身の毛は黄金のやうに日光に燦いて居りました。そして、一足歩めば、歩むたんびに張り切つた乳房から、命の糧の貴い乳が、ポタリ／＼と滴り落ちるのであります。母親達はこれを見て、不思議に打たれて居るばかりであつたが、小さな赤ン坊たちは、如何にも嬉しうに、紅葉のやうな

手を其の牝牛の方へ出して、可愛らしい、可愛らしい聲を出して笑つたのであります。

さて母親達は、その牛には番人もなく、たつた獨りでノソ／＼と歩いて來て、どの百姓家にも立止まるのを見て、その張り切つた乳房から滴る乳を貰はうと、大急ぎで杯や乳入れを取りに行きました。牛は、母親達が胸にさも嬉しうにしてゐる赤ン坊を抱き、後に饑じさうにしてゐる子供を、ゾロ／＼と引連れて、自分の方へ寄つて來るのを見て、デツと静かに立止まつて、大きな可愛らしい眼で彼等を見詰めました。そこで、母親達はソツと寄り添つて、杯や壺に一杯になる



と、それを子供に飲ませます。子供等は喜んで腹一杯に飲む、それから母親達も飲む、父親達も飲みました。女も男も、老人も若い者も、皆此の不思議な牛の恵を受けて、永い間の飢を忘れしました。それに、搾つても搾つても、牛の乳はいくらでも出るのです。村中の人々は、此不思議な牛は只の牛ではあるまい。直ぐ村はづれの不思議な丘から迷つて来た不思議な牛に違ひない。それで、今日はこんな澤山乳を飲ませて呉れたが、明日は屹度居なくなるだらうと思つてゐました。所が日が暮れると直ぐ牛はゐなくなり、したが翌日朝の光があかく、と緑の草を照すと、牛は村のお寺の近

くの野原で、ちやんと草を食べて居りました。赤ン坊も子供も母親も、それから村中の人達が皆集つて来て、昨日のやうに乳を搾りましたが、牛は皆の思ふが儘になつて、その乳は相變らず、いくらでも出ました。斯ういふ譯で、ひどい飢饉が國中の人達を苦めても、此の草緑なる村の赤ン坊ばかりは、まるく肥つて居りました。又乳の効能がある故か、此村の人ばかりは一人も悪い疫に罹る者は無かつたのでした。

牛は相變らず乳を出して居りました。そして何時までも此村に



居ました。赤ン坊が成人するまで居るつもりであつたのでせう。所がツイ悪い一人の女があつたために牛はどうも何處かへ行つてしまひました。

それは斯ういふ事でした。世の中にはどんな町にでも村にでも外の人より自分の方が賢く見せたいとする見え坊があるものです。皆さん達の所には、そんな人はありませんが、此の村には、一人の見え坊の女がありました。

ある時村の女の人達が集つて、不思議な牛について、いろ／＼な事を話して居りました。ある一人が

「妾はあんな不思議な牛は世の中に又どないと思ひます。あの牛の乳は、搾つても搾つても、いくらでも出ます。世の中に、あの牛の乳で一杯にならぬ者はあるまいと思ひます。たとへ海の水が悉皆無くなつても、あの牛の乳で一杯にする事が出来ませう。」といひました。こゝに居合せた人々は、その通りですといひました。

するとその見え坊の女が立上つて

「なるほど、あの牛の乳で大海の水を一杯にする事は出来ませうが、しかし、妾の家には、どんなに澤山入れても、一杯にならぬバケツがあります」といひました。外の人々はこれを聞いて「そんなものはあり



ますまい」と笑ひました。彼の女は、

「それでは私と一緒に来て御覽なさい」と、一つのバケツを提げて牛の傍へ行きました。牛はお寺の傍の野で草を食べて居りました。女は乳の下へ其のバケツを置きました。そして乳を搾り初めました。

いくら搾つてもく、その小さいバケツには乳は一杯になりませんでした。それも其筈見え坊の女はバケツの底に澤山穴を明けてゐたのです。見る／＼うちに、白い乳が芝生一面になつて。しまひました。外の女達は笑ひながら、自分等が負けたから、モウ乳を搾る

のは止して呉れと言ひました。けれども女は矢張り止しませんでした。四邊は乳で池のやうになりました。

すると、今までデツとしてゐた牛は、ふと振返つて四邊を見廻しました。そして、自分が此の悪い女に無益な乳を搾られて居るといふ事に氣が注いたと見えて、二聲三聲高く吠て、フイと何處かへ行つて了ひました。

其時村の赤ン坊等は、一緒に聲高く泣き出しました。けれども牛は歸つて来ませんでした。翌日も、その翌日も、牛はどう／＼何時までも歸つて来ませんでした。



【九八】 駒鳥に化せられて

不圖した事から悪人の仲間入を爲る者もあれば何でも無い事が縁となつて善に遷るもあり人情は機微の間に動くものである。今から數年前の話であるが、瑞典の首府ストックホルムの監獄から典を以て放免された囚人があつた。彼は數回の前科者で、最後に放火脱獄の故を以て無期徒刑に處せられた。彼は自棄になつて、益々

獄内で亂暴を働き、獄吏も彼に對しては施す可き術も無く、困り切つて居た。終身出獄の望は無いと思ひ諦めた彼は、「どうせ牢屋の中で死ぬる身體だ、何をしても構ふものか」とひ死刑に處せられやうが、涙一滴こぼして呉れる者があるでなし、構ふものか」といふ風に、獄則を破るなど、誠に手に負へぬ代物であつた。

然るに、ある日の事、一羽の可愛らしい駒鳥が彼の獄房の中へ舞ひ込んで、去らうともしない。退屈まざれに彼は手を伸べて其の駒鳥を捕へた。さうして、折好く運んで來た麵麩を遣ると、鳥は喜んでそれを食べて何處へも行かない。彼は興ある事に思ふて、一日二日と



飼ふてゐるうちに、次第々々に可愛くなつて来た。これまで嘗て心に優しいの可愛いのと、いふやうな温かい情の湧いた覚えの無い彼は、此の小鳥に逢ふた刹那、そのむかし母の懐にゐだかれゐた時以來、何十年來、氷のやうに冷くなつてゐた彼の血は、恰も朝日に照された氷の溶けるやうに、總身の血管に温かい血が流れ始めたやうに覺えた。斯て彼は數日間その小鳥を此上なく愛した。

五六日の後、彼は獄で命せられた勞働に出た。我子に逢ふやうな思で歸つて來ると、不在の間に駒鳥が何處かへ行つて了つてゐる。彼は、さみしくて、仕方がない。其夜は、終夜、駒鳥の事を思ひ明し

て、翌朝早く眼を覺ますと、彼の駒鳥が、木片、紙屑などを啣へて來て巢を造り始めた。やがて巢も出來た。そのうちに四羽の雛をかへした。

斯るうちにも、囚人は毎日、幾ばかり給與されるパンを割いて、駒鳥親子を養ふた。鳥は彼に馴れる親鳥の雛を連れて彼の膝の上により、肩の上へ飛びあがる。此時、何十年來、嘗て覺えぬ愉快さを覺えて、彼の満面には、長閑な笑が漾うたのである。

彼はおとなしくなつた。やさしくなつた。獄則を守るやうになつた。彼の性質は、殆んど一變した。此の駒鳥を始めて見てから二



ケ年目に、彼は立派な善人となつて、特赦されたのである。

【九九】 ハンヤンの悔改

ジョン・ハンヤンと云へば、彼の耶蘇教信者が聖書に次で神聖なるものとして敬讀する「天路歷程」の著書として何人も知らぬ者はあるまい。しかし此の人は始めより決して斯る聖書を著し、人に尊敬せられるやうな人で無かつた。それは、實に亂暴狼藉極まり無き惡漢であつたのだが、ある一事によつて既往の罪惡を悔改め、そして斯る聖者となつたのである。彼の「天路歷程」一篇は、實に彼が過

去の罪惡に満ちたる生活より、一轉して聖者の生活に移つた心の歴史とも見るべきものである。今、その一大回心を爲した次第を記して見やう。

ハンヤンは英國の或る片田舎の賤しい鑛物師の息子であつた。素より貧乏に生れたので、教育としては村の小學校にしばらく通つたばかりであつたが、幼少な時から、其の總ての行爲が悪いことばかりで、或時地主の家畜に石油を濺いで火を點け、それを追廻したり、又は五人の年長者を相手に喧嘩をして耳を截られて不具となつた程である。又十五歳の時までに村人から金を詐取したことも、凡そ一千



圓に上るといふ位だから、いかに彼が悪漢であつたかを察せらるゝ。斯して二十五歳の時まで、悪事の數限を盡した。村人はモウ度外視してしまつて對手にせぬ。

然るに、これが時節因縁の到來といふものか、或日バンヤンは自分の職業なる鑄懸を爲やうと、いつもの通り索齋を肩にして家を出たが、村の裁判所の前を通りかゝると、黒山のやうに人が集まつて居るから、何事だらうと、傍の人に訊ねると、先刻珍らしい自訴人があつたからだと答へる。そこで仔細を問ふて見たら斯うだつた。

バンヤンが其處へ來ると、ツイ前刻に一人の老人が突然法廷へ闖

入して裁判官に云ふやうには「私は幼少の時から此の白髮に至るまで、盜賊ばかりして居りました。およそこの近郷近在數十里の間に於て、數十年來竊盜犯に、私の關係しないものは一つもありません。それに、私は一度も犯罪を發覺された事はない。尙このまゝに盜賊家業を續くればとて、發覺されるやうなことはありませんまいが、私はつらく、既往の罪惡を思ひますれば、良心に苦しめられて、何うしても堪え忍ぶ事は出来ませぬ。それ故このあひだから、過しむかしの我身の罪に、自分自ら苦しめられて、どうも斯うして自訴いたすのでございます。何うか能く御糺明の上、相當の刑罰に處し



て下さい」と、自分が既往の罪惡を悉く白状した。

役人はそれを聞いて見ると、成程その言ふ所に一々據所があるので、直に繩を打つて審問中であるとのこと。

バンヤンは靜にこれを聞き終つてから、しばし言葉もなくて、深き思に沈んで居るやうであつたが、其日は職業に出ないで、直に其場から踵を回して我家に歸り、夜着引被いで打臥した。それから四五日は家から一步も外へ出なかつた。其中に彼の自訴盜賊は罪狀分明となり、兩三度の殺人犯もあつたといふので、刑場の露と消えた。バンヤンは之を聞いて、一層沈み勝になつた。宛かも氣が脱たものゝ

やうになり、時には狂人染たこともあつた。一月、二月経つうちに、彼が性情はコロリと變化した。強情は從順となり、執拗は親切となり、荒々しい言葉遣は優しくなつた。鋭かつた容貌風姿も溫和となつた。人の不幸があれば行つて慰め、急があれば行つて助け、善を勧め、惡を制し、常に暇あれば聖書を繙いて道を求むるなど、まるきり生れ變つたやうになつて了つた。

村人の驚きは何の位であつたらうか。その所以を度々訊ねた。バンヤンは都度感謝の色を面に表して、只笑つてゐるばかりであつた。三年の後、村人はこれまで疫病よりも厭惡してゐた彼を懇請して



村の寺院の牧師とした。後、バンヤンは所々を歴遊して教を布いたが、到る處の善男善女は彼を大僧正と仰いで、其説教壇に謝拜せぬ者は無かつたといふことである。

あゝ、バンヤンは實に彼の自訴盜賊に感じて、我身の既往に於ける罪惡を悔改めて斯る聖者となつたのである。彼が作つた「天路歷程」一篇は、げに彼が心中の惡念善心の闘争の經過を記したものと見られやう。「懺悔すれば衆罪は草露の如く消ゆる」とは我佛陀の金言であるが、佛耶二教はこの點に於て何等相違もない。我等も亦た他山の石として聖者バンヤンの芳躅をたづぬべきである。

1100

情の仇討

昔伊太利ゼノア共和国が貴族黨と民黨との二つに分れて、兩黨が鏑を削つた事があつた。時に民黨の首領はユーベルトと云ふ階級は平民であるが高尙な品性と勝れた知能手腕を持つた國士であつた。彼はゼノア共和国が貴族に依つて政權を壟斷される事を慨して、驟然起つて民主政治を布くべき秋である事を呼號しし。ばらくは民主政體を保つてゐたが結局貴族黨の勝利に歸して、一時地に墜つた彼等の勢力を復活したのであつた。其結果として、貴族等はユー



ベルトを叛徒と爲して國內を追放する事となつた。其時貴族黨の首領となつたるアドルノは、ユーベルトに對して其の宣告を與へた。彼は傲慢無禮の態度をもつてユーベルトに對して宣告すらく

「こりやく、汝賤しい職工の子たる分限をも願はず、ゼノアの貴族に對して謀叛を敢てしたる不届奴——而も貴族各位の格別の御慈悲によつて、只汝の元の身分に歸すといふばかりでお許しになる。有難く思へと言つた、ユーベルトは謹んで其の裁判に服したが、餘りの傲慢なる態度には堪へ兼ね、アドルノに對して彼が身と同様なる高い地位に昇つて居る自分に對して用ひた其傲慢なる言葉を、何時か

は後悔すべき時機が來るであらうといふ事を言はずには居られなかつた。

彼は故國を立去つて、ヴェニスに屬領たる群島内のある一島に落付いて商業に従事した所が、其の勤勉と手腕とは、數年の中に曾てゼノアにわたる時以上の大金持となり、其の高潔なる品性に對する名聲は彼の財産と一致した。

ユーベルトが商用で度々チユーニスの市に往復した。或る時彼がチユーニスの市長の別荘を訪ねると、其處に一人年若い白人の奴隸が、鐵枷を足に箝められて働いてゐるのが、強く彼の注意を惹いた。



其の若者は仕事を強られて、彼の弱々しい體質には其仕事は如何にも苦しいと見えて、度々道具に凭りかゝつて、さも苦しげに溜息をして、頬には涙を流して居る。

これを見たユーベルトの優しい心は動いた。そこで其若者に向つて伊太利語で話を仕掛けると、彼は果して伊太利人であつて熱心にユーベルトの語に對へて物語つた。彼はユーベルトの故國ゼノアの人であつたのである。

「時にお前さんの名は何といふね。決して遠慮の入る者でないか、身許を残らず話してお呉んなさい。」と尋ねた。

「いや、有難うございます。しかし、秘密にして戴かねばなりません。と申すのは私の身分が若し解りましたら、私は誘拐した者に私の身分が知れますと、莫大の身代金を取るだらうと思ふのであります。何をお隠し申しませう、實私にはゼノアの元首たるアドルノの一人息子でございます。」と答へた。

「アドルノ」と聞いたユーベルトは、息が詰まるやうに覺えて、思はず言葉を送切らせた。國家の安寧のため、國民の自由のために奔走した自分を、天地も容れざる謀叛人と做して、國內を追放したばかりか、傲慢無禮の態度を以て我に臨んだ彼アドルノ。何時かは我に對し



て行ふた其傲慢の態度を悔ゆる時節が來るであらうと言つた彼アドルノ。其一人息子が斯る所で奴隸となつて鐵の鎖で繋がれて働いて居やうと夢にも思ひ儲けぬ事であつた。さは言へ彼は斯う考へた

「あゝ有難い。今ぞ自分が情の警打をする時節が來た」と。彼は其若者と別れて直にアドルノの息子の權利を保留してゐる海賊船長に面會して身代金を取極めた所五千圓より少くはと言ふ。ユーベルトは直に其金額を支拂ひ從者に一頭の馬と二揃の衣服を持たせて若者の所へ引返した。若者は前の通りに働いてゐた。ユーベ

ルトは彼の自由になつた事を言ひ聞かせ自らその足枷を外し衣服を着せさせ馬に乗せると若者は夢ではないかと思ひ惑ふて餘りの嬉しさにわが救ひ主に禮を言ふべき辭さへも無かつた。けれどもやがてユーベルトに卓子と部屋を與へられて其好運が眞であつた事を知つた。

チユーニスに數日逗留の後ユーベルトはアドルノの息子を連れて家路に向つた。彼は暫く彼の家に若者を留めて我最も親愛なる友人として彼を待遇した後屈強なる護衛者を選んで彼に付け旅の用意も充分に整へさせ片手に黄金の入つた財布を持たせ片手に一



通の手紙を持たせて斯う言つた。

「親愛なる若者よ。私はお前を今しばらく引留めたいのであるが、お前の懐しい父母や友達がさぞ待兼て居やうから引留めはせぬ。いざ旅の用意をせよ。この財布には旅費が入つて居る。此の手紙はお前のお父さんに渡して呉れ。父さまは多分私を覚えてゐらるであらう。さらば私もお前を忘れまい。お前も私を忘れて呉れるなよ」

若者は熱い感謝の涙を彼に潑いだ。互に相抱いて立別れたのであつた。

斯て海上恙なくゼノアの故國に歸つた。アドルノ夫婦の喜びは云ふまでもない。我子の生死が知れぬにつけて海上で船が沈没したのであらうとばかり思ひ詰めてゐたのが、チユーニスで海賊船に誘拐され、奴隷となつてゐたと聞いて、死んだ者が蘇生したやうに喜んだ。「さてお前を斯うして救つて呉れた恩人は誰方か」と尋ねると、それは此手紙を御覽下さらば、萬事解りますと差出した手紙を讀んで見ると

「卑しい職工の子が此の手紙を奉る。貴君が私に加へられた輕蔑に對して、何時かは返報いたさうと申上げたが、幸にも只今其一



念を貫徹する事が出来ました。傲慢なる貴族どの。あなたの一人息子を救つたのは其の下賤なる職工の子であるといふ事を御承知あれ……」

アドルノは讀むなり、覺えずバタリと手紙を手から落して、兩手で顔を掩ふた。彼の妻子は同時にユーベルトの氣高い人格に感嘆して、彼の徳をば賞讃して息まなかつた。

貴族アドルノは受けたる恩を忘れなかつた。直ちに他の貴族にユーベルトの高潔なる人格を説いて、前の宣告を取消してゼノアに歸る事を許したのであつた。

ユーベルトは巨萬の財産を擁して故郷へ錦を飾つた。其後彼は一般市民の尊敬を受けて、平和の中に其の一生を終つた。



## 珍談百集の後に

### (一) 珍といふ事

□「珍談百集」を蒐め畢つて、梓に附して見ると、尙豫定の紙數に充ちて居らぬのを幸ひに「珍」といふ事に就て思ひ出した事を一つ二つ書いて見やう。

□何ういふ理由だか知らないが、珍といふ音は妙に滑稽な、俗惡な、輕

薄な感じを人に與へる。珍妙・珍趣向・珍物・珍聞など其本來の意味は高尚であるのにも拘はらず、一般の俗語に使用せられると、珍妙といふ事は滑稽な概念を呼び起し、珍趣向は何か世間並外れた趣向といふ意味になり、珍物は變な物、珍聞は「何か近頃は珍聞はございませんか」などいふと、これまた濡手で泡の金儲けはないかとか、變つた事は無いかといふやうな意味に用ひられる。徳川時代の所謂通人なるものは、絶わす「珍で、ゲスナ」とか「珍ですな」などいふやうな語を使つて、俗惡な、變な物事を喜んだものである。

□元來「珍」といふ字の現して居る意味は「説文」に「寶ナリ、玉に从



フ金ノ聲」とあつて、寶玉の事である。これを形容詞に使つて、珍寶とか珍妙とかいへば、寶といふものは世に稀であつて人の愛好する種々の美質を具へて居るから、世に稀なる立派さ、美しさを形容して「珍」と稱したものである。國語にこれを「めづらし」と訓むのは「愛ツル」といふ意から出たもので「世にも稀なる美しいもの、善いものなどゝして愛づる」の意であらうといふのである。

□それ故、珍といふ事は、本來、稀である、世の常でない、希有である、奇妙である。善美であるといふやうな意味であつて、決して普通に感じらるやうな俗悪な、輕薄な意味ではない。

□所が、これが世間一般に輕薄な、俗悪な意味に用ひられるといふのは、元來珍といふ語は佛教語に多く用ひられる。當に珍妙華を雨らすべし」とか「妻子珍寶及王位」などゝ。と經文に稀有、善美を形容する語に多く此語を用ひ、禪宗の語に「珍重」といふのは、御大事になさる御身を大切にといふ挨拶に用ひた語であつたのが、御珍重あらせられ」など今では世間一般の手紙の文の挨拶などに用ひられるやうになり、佛教語が廣く世間に用ひられるに連れ、其のチンといふ音が聽覺の神經に一種軽い、滑稽な感じを與へるのと、餘り一般的に用ひられた所から其語本來の意味を失つて了つたものと見ゆる。



□いづれにもせよ、珍しいといふ事は、稀などいふ事である。山海の珍味も馴れたら粗末なものが却つて旨しい。馴れるといふ事は、感じ鈍くなるといふ事である。ダイヤモンドや黄金は、普通の石や瓦と違つた美しい光澤と質を持つて、奇しき感じを人に與へるから、人が愛づる、即ちめづらしい。それでも若しダイヤモンドの部屋に入り、ダイヤモンドを庭きつめて三日も居れば飽いて了つて、めづる心は起るまい。

□それ故に、布教壇上に立つた布教師が、講話の中に好い譬喩や因縁を入れたら、其の話から前後の教誨を憶ひ起さすの便となり、理解す

るの捷徑となり、講話全體が生きるのであるが、さて其譬喩にしる因縁にしる、度々聞かされ、耳に馴れては、感じが鈍くなつて話し効能が無くなるばかりか、「またあの話か」と言はれるやうになつては、折角の講話全體が死んで了ふやうな事になる。故に布教師たるものは絶えず新しい感興を惹き「おはなし」の蒐集選擇が必要である。

### (二) 光る者皆金ならず

□さればとて「光る者必ず黄金ならず」といふ諺があるが、新しい話必しも布教壇上の珍話珍談として珍重すべきでない。



□例の一休和尚が、將軍義滿公の寶物展覽會を見に往つた。畠山正長、これは大禪師、よく〜御入來と丁寧に出迎へて、いざ某御案内仕らんと、大きな聲で叫び上げた寶の數々をぢり〜と見流した一休和尚が、一覽してから其處に居並ぶ諸侯に對つて

□さて各々方。只今畠山殿の御披露をされた寶と仰せられるもの、此の一休が見れば一向寶でも何でもござらぬ。いざ其仔細をお話し申さう

□先づ第一に古塚の甕かぶこれを木に懸かくる時は聲を發すといふ。これを珍だと仰せあるが、何が珍でござる。聞けば此甕は水が洩ると

いふ。第一水が洩つては甕の用を爲さぬではござらぬか。又、木に懸けて音がするのが宜しければ、鈴でも懸ける方が宜しからう。

□次に夜光の珠、夜輝く事白晝はくぢうの如しと仰せられるが、これを高く懸けて日月の如く世界中を照すものなら寶でもござらうが、只夜分に光を出すだけなら、こんなものは、如何程でもござる。先づあの螢ほたるといふ虫は夜になつたら光を放つ。それから魚類の中にもさういふものがござる。腐れた木、海水なども光を放つ事がござる。こんな小さい夜光の珠よりも、夜光る者が貴くば蠟燭の火が如何程貴いと思はれるか。



□しかし、畠山殿、それなる打出の小槌とか申す物は、それは振れば種々々の寶が出るとか聞き及んだが、それこそ眞の寶でござる。何卒無暗に振つて下され。此の一本も少しく頂戴いたしたいものでござる。

□いや、禪師、左様な譯ではござらぬ。こんな槌は昔俵藤田秀郷が龍宮より持ち歸つた頃には随分出たでもござらうが、只今では一向何も出ませぬ。と畠山は頭を搔いて居る。

□それでは寶物でも何でも無い、只の木槌ではござらぬか。畠山が、それでも持手に依ては出まいものでもござりませぬ。一休、成程、然

らば貴殿が若し此木槌の持主になつて澤山の金持になつたら何うなさるか。畠山、若し私に多くの金が出来ましたら日本中の者に分けます。一休、それはまことに好い、心懸ぢや。しかし餘り澤山出ると皆が働かぬやうになつて困らうぞ。畠山、いや、困りませぬ、皆の者が寝て食ひます。一休、皆の者が寝てばかりゐて働かぬやうになれば、米は誰が作るか。畠山はへいとばかりに一言もなく、こそこそと逃げて了つた。

□そこへ斯波義門が来て「大禪師、あなたのやうに左様仰せられては寶物は滅茶々々でござります。寶と申す者は世に珍しいものを申



ので、既に是なる丹龜の巾着、珊瑚の皿などは、何處へ往つても見られぬ品と存じます。それで……

□一休皆まで聞かすして「そりや珍らしい言へば珍らしいであらうが、そんな者は謂はゞ龜の中の片輪ではないか。且又萬年の壽命を持つと言はれた龜を無慘々々殺して作つた其腰巾着、そんな不吉な物が寶と言はれやうか。又珊瑚の皿は毒に感じて割れるといふが、若し客に出して割れた時は、毒を盛つた事になる、其時は客に對して申分の無い次第ではないか。

□そればかりか、それなる月影の硯とやら、月下に置けば露を含むと

それは硯に限らぬ事、石や瓦でも夜氣に觸るれば露を含む。硯なれば水を入れて磨れば好いではござらぬか。

□斯ういふ風に諸家から献上の寶を片つ端から散々に言ひ貶して、最後に膝を正して將軍始め諸大名をすらりと見渡し

□凡そ世の中に寶と申す物は皆こんな物ばかりでござる。眞の寶はこんな物では無くて忠義でござるぞ。こんな寶を献上するよりも、忠義を献上いたされよ。

□昔、或る國の某と申せし君は、鶴をば深く愛して、臣下よりも重く育てられた。然るに一旦、此國他國より攻せられし時、急ぎ軍勢を召さ



れたが、臣下は深く王を恨んで、我君日比我等よりも鶴をば深く愛し給へば、我等よりも鶴を戦場に出して敵を防ぎ給へと更に取り合はず、其國終に滅びたといふ。

□用なき實に現を抜かして、文武の道を忘れ心の修行を怠る者は皆是の如しであらう。一朝大事迫る時、斯る品々が何の用をか爲し申さうぞ。いやこれは話が妙な風になり申した。これは他處で言ふ事でござつた。許されられい。いや、飛んだ失禮を致したと、ついで立つて出て行かれたといふ話がある。

□これも一つの珍談であらう。當時、奢侈を極めた將軍への諷諫甚

だ面白い。さて、珍談々々と無暗に變な話ばかりを探してゐては、義満將軍の實同様譏者の笑を招く。珍談を爲て面白がらせるのは、落語家などの仕事、我等は珍談其者が目的でなくて、佛の教を聞かすのが目的である。珍談は讚佛乘の因縁たるに過ぎない。私はさういふ心持で本書を編んだのである。



通俗教化資料第一編

蘇芳菴主人新著

大典記念出版

赤穂義士傳説教

三五版形五百頁  
定價金八拾錢  
郵税金八錢

「あられたのし思ひは晴る、身は捨つる浮世の月にかゝる雲なし」の辭世を残して自刃した、大石内蔵助はじめ四十七義士が忠義の行ひは、時相去る二百五十年、語り傳へ言ひ傳へて芝居に淨瑠璃に浪花節に或はいかめしい校堂の訓話にも、さては牛逐ふ郎の童が小唄の端々にまで唄はれて、國民を感化した。日本國民に武士道の血の潤れぬ以上、今後幾百年、幾千年の後までも、不易の感化を我等に興るであらう。而かも憾むらくは未だ此の國民的大教訓の結晶を把つて佛敎道徳布敎の資料としたものは一本もない。蘇芳菴主人に其畢生の筆力に平生の蘊蓄を傾け、四十七士の壯烈なる義舉を彩る幾多の教訓、或は哀れな美しい人情の物語りを縦横に取つて遂に佛敎の信仰の一路に收め來る、全篇二十四席、一席は一席より佳興に入つて、長く讀者を傷殺せしめるものがある、今や我等曠古の大典に逢ひ奉り此國民的感化の一大事を布敎の資料とせる新しき試を全て、ひそかに大典記念の微意を表し奉る。

發行所 京東六條 電話下四五八番 大阪一七〇四番 法藏館

大正四年十二月五日印刷  
大正四年十二月十日發行

定價金四拾五錢

不許複製

著者 稻村修道

發行兼印刷者 西村七兵衛

京都市下京區中珠敷屋町烏丸東入  
二十人講町二十二番戶

發行所 京都市東六條 電話下四五八番 大阪一七〇四番 法藏館



# 新布教叢書

稻村修道師編

第一編

▼布教百笑話

定價四拾五錢

第二編

▼釋尊御一代記說教

定價四拾五錢

第三編

▼應病與藥

定價四拾五錢

第四編

▼對機說法

定價四拾五錢

第五編

▼珍談百集

定價四拾五錢

發行所 東京市都六區大塚一〇七番地 電話四〇七 法藏館



325  
357

8.5.18



終